

上海辞書出版社《唐詩鑑賞辞典》訳注稿

——李商隱篇(11)——

門脇 廣文

Commentary on the Four Poems of Li Shang-yin
in the *Tang-shi jian-shang ci-dian* (*Dictionary for
the Appreciation of the Tang Poems. Published by
the Shang-hai Dictionary publication Company*)
—A Draft Translation with Annotations.

Kadowaki Hirofumi

[目 次]

はじめに

- | | | |
|------|--------------|-----|
| [41] | 離亭賦得折楊柳 (二首) | 沈祖棻 |
| [42] | 宮妓 | 劉学鐸 |
| [43] | 宮辞 | 王思宇 |
| [44] | 代贈二首 | 王思宇 |

はじめに

昨年度(2002年度)にひきつづき、上海辞書出版社《唐詩鑑賞辞典》所収の李商隱詩についての賞析文の訳注稿四篇を公表する。現在のメンバーは大東文化大学文学部非常勤講師の三枝秀子・外国語学部非常勤講師の何旭、学部卒業生の関久美子(現在、東京学芸大学大学院修士課程2年)、後藤庸介、大学院博士課程後期課程3年の沼尻俊裕、1年の宮下聖俊、秋谷幸治、博士課程前期課程2年の鈴木拓也、李怡静、学部4年の石川優子、そして私(門脇)の十一人である。なお、今回の担当者は次の通り。

- | | | |
|------|--------------|------|
| [41] | 離亭賦得折楊柳 (二首) | 宮下聖俊 |
| [42] | 宮妓 | 関久美子 |
| [43] | 宮辞 | 鈴木拓也 |
| [44] | 代贈二首 | 秋谷幸治 |

離亭賦得折楊柳（二首）	離亭にて折楊柳を賦し得たり（二首）
暫憑樽酒送無悽	暫く樽酒に憑りて無悽を送る
莫損愁眉与細腰	損ふ莫かれ愁眉と細腰とを
人世死前惟有別	人世死の前惟だ別れ有るのみ
春風争擬惜長条	春風争で擬せん長條を惜しまんことを
含煙惹霧每依依	煙を含み霧を惹くも毎に依依たり
万緒千条落暉暉	万緒千条落暉を払ふ
為報行人休尽折	行人に報ゆる為に尽くは折るを休めよ
半留相送半迎帰	半ばは相ひ送るを留め半ばは帰るを迎へん

この二首の詩の主題は、杜牧の〈贈別〉詩⁽¹⁾と同じである。二首とも、愛する女性との別れの時の、その別れの悲しみを詠んだ作品である。しかし、その別れの描き方は、二首でそれぞれ異なっている。

「離亭」とは、お別れをしているその場所を意味しており、「亭」とは宿場のことである。「賦得（賦し得たり）」とは、昔から詩題として習慣的に用いられた言葉である。それはつまり「ある物、あるいはある事のために詩を作る」という意味である。⁽²⁾

詩人は、愛する人に今まさに別れを告げようとしているその宿場の中にいる。そして、そこで詩を作り、その中に、柳を手折って見送るという昔ながらのしかも今なお人の心をひきつける風習⁽³⁾を詠みこむことで、別れを惜しむ心を述べているのである。

1

第一首の第一句「暫憑樽酒送無悽（暫く樽酒に憑りて無悽を送る）」は、別れに臨んだその時のお互いの心情を描写している。「無悽」とは「無聊（やるせなさ）」のことである。

お互いに愛し合いながらも、生きながらにして離ればなれになるのだから、やるせなく感じるのも当然である。だが別れ別れになるのは必至で、どうすることもできない。だから、しばし酒の力を借りて別れの悲しみを追い払うほかない。

第二句「莫損愁眉与細腰（損ふ莫かれ愁眉と細腰とを）」は、旅立つ者から残される者への慰めの言葉である。すでに、ことここにいたった以上、あともどりはできない。他にどうすれば

良いというのか。

あなたに望むのは、くれぐれも体を大切にしてほしいということだ。あなたはすでにその眉を曇らせ身を細らせている。もうこれ以上悲しみに耐えられようはずがない。

第二句がここで流れを変えて気持ちをいくぶん和らげたのは、まさに後半の二句でその気持ちをさらにきつく引き締めるためである。

第三句「人世死前惟有別（人世 死の前 惟だ別れ有るのみ）」は、「心を驚かし魄をゆさぶる」言葉⁽⁴⁾である。

死は別にして、別離以上に人を苦しめるものなどない。

この言葉は、理性的な判断であり、意見である。しかし、こんなにも深い悲しみの情感をも表現しているのである。

第四句「春風争擬惜長条（春風 争で擬せん 長条を惜しまんことを）」は第三句の内容を承け、第二句の内容と対応している。

そうであるなら、もし春風に情があれば、長く伸びた柳の枝を惜しむからといって、「人世 死の前 惟だ別れ有るのみ」という苦しみで胸一杯になっている人達に、思う存分枝を折ることを許さないなどということがあろうか。

この句の「惜」という字と、第二句の「損」という字は互いに呼応している。なぜなら、「愁眉（愁いを帯びた眉）」と「細腰（やせ細った腰）」とは、表向きに女性を形容しているばかりか、柳のこととも関連しているからである。柳の葉によって美女の眉を喩え⁽⁵⁾、柳の幹によって美女の腰を喩える⁽⁶⁾のは、古典詩歌の中では伝統的な比喩である。つまり「莫損（損ふ莫かれ）」には、柳の枝を折ってはいけないという意味も含まれているのである。

2

二首目は一気に最後まで続いていて、一首目と描き方を変えている。

前半では柳の姿の愛らしさを描写している。もやの中であろうと、夕陽の下であろうと、いつもたくさんの枝葉は名残惜しそうにゆらゆら（依依）と揺れてまるで心があるかのようだ。

そして柳はこのように情に厚いのが、まさかただ旅立つ人を見送るだけで、帰ってくる旅人を顧みないはずはない。旅立つ人を見送るのはまことに悲しむべきことである。そうだとしたら、帰ってくる人を迎えるのを喜ばないはずがない。このため、ここでも第一首の「損ふ莫かれ 愁眉と細腰とを」という句の持つ二重の意味に関係してくるのである。

人について言えば、旅立ってしまっても、それでも帰ってくる可能性はあるのである。だから「愁眉」と「細腰」とを損なうまでに悲しむ必要などない——ということである。柳について言えば、人の見送りに関わった以上、人の出迎えにも関わらなければならない。だから柳を一時に折り尽くす必要もない。半分は折りとして、人が旅立つのを見送り、半分は残しておき、人が帰っ

てくるのを迎える方が良いではないか——ということである。

3

一首目では、まず暗喩の形を用いて柳を折ることを禁じ、その後一転して折らないわけにはいかないということをはっきりと述べる。このように、きっぱりとした中にも悲観的な情調に満ちた語り口となっている。

しかし第二首では、さらにまた大きく転換し、折りたくても半分しか折れないという。婉曲でやわらかく、楽観的なムードに富んだ語り口になっている。第一首と語り口の上では真っ正面から対立し、感情の面では救いの手をさしのべられているのである。感情の曲折して深いことと、語り口の移りかわりや変化は、まことに人を驚嘆させる。

沈祖棻（宮下聖俊訳）

(1) 杜牧<贈別>詩:

娉娉裊裊十三余	<small>ほうほうじょうじょう</small> 娉娉裊裊たり 十三余
豆蔻梢頭二月初	<small>とうこうしょうとう</small> 豆蔻梢頭二月の初め
春風十里揚州路	春風十里 揚州路
卷上珠簾総不如	巻きて珠簾を上ぐる 総べて如かず
多情却似総無情	情多きは却 ^{かえ} って似る 総べて情無きに
惟覚樽前笑不成	惟だ覚ゆ 樽前 ^{たんぜん} 笑はんとして成らざるを
蠟燭有心還惜別	蠟燭に心有り還 ^ま た別れを惜しみ
替人垂涙到天明	人に替りて涙を垂れ 天明に到る

(2)「賦得」：古くは前人の詩句を抜き出して詩題にした場合、その題の頭に「賦得」の二字を冠していた。科挙で詩を作ることが課された場合、多く前人の詩句が詩題として出題されたので、受験者の詩題にはひとしく「賦得」の二字がつけられることになった。それが拡大され、応制詩や文人が集まって詩を作る際にも使われるようになった。その後ついには「賦得」をひとつの詩体と見なすようになる。景色に即して詩をつくる者も往々にして「賦得」を題にするようになった。

(3)「折楊」の風習：「折楊」に関する語は古くは《詩經》齊風、東方未明に「折柳樊圃」と見える。だがこれは別離とは関係しない。向島成美氏《漢詩のことば》によると、「折楊」と別離とが関連するのは、梁、陳以降の作品に多く見られるようになるということである。

(4)「心を驚かし魄をゆさぶる」言葉：《詩品》上品の<古詩>に「文温以麗、意悲而遠。驚心動魄、可謂幾乎一字千金」とある。これを踏まえた言いまわし。

(5)柳の葉によって美女の眉を喩え：蜀後王<甘州曲>「柳眉桃臉不勝春」、白居易<長恨歌>「芙蓉如面柳如眉、對比如何不淚垂」という作品がある。

(6)柳の幹によって美女の腰を喩える：温庭筠<南歌子詞>「轉盼如波眼、娉婷以柳腰」、戴復古<題申李山家所藏李伯時画村田樂図>「管絃声按商麋、細腰轉柳腰花十八」という作品がある。

宮 妓

珠箔軽明払玉墀
 披香新殿闕腰支
 不須看尽魚龍戲
 終遣君王怒僊師

宮 妓

珠箔 軽明にして 玉墀^{きょくち}を払^{はら}ひ
 披香の新殿に 腰支^{たか}を闕^{たか}はす
 看^み尽^つくすを須^{もち}ひず 魚龍^{ぎょりゅう}の戲
 終^{つひ}に君王^{きんわう}をして 僊師^{せんし}を怒^{いか}ら遣^{つか}めん

これは、宮廷の生活を詠みながら、若干の風刺の意を込めた詩である。題の「宮妓」とは、唐代の宮廷教坊にいた歌妓をいう。当時、都長安には左右の教坊（宮廷の歌妓を管理する役所で、雅楽以外の音楽や歌舞、雑技などの教練を管轄した）が設けられていた。主に、左教坊は歌を、右教坊は舞踊を得意とした。唐の高祖の時代には、宮中に内教坊が置かれ、玄宗の開元年間の初頭には、さらに蓬莱宮⁽¹⁾のそばにも設けられた。この詩に詠まれている「宮妓」とは、当然この内教坊にいた歌妓のことである。

1

前半二句「珠箔軽明払玉墀 披香新殿闕腰支」は、宮廷内で行われている歌や踊りの場面を描いており、まさにこの詩のテーマを示している。

漢代、未央宮⁽²⁾に披香殿があった。漢の成帝⁽³⁾の皇后となった趙飛燕⁽⁴⁾が、歌舞を披露した場所である。唐代の慶善宮⁽⁵⁾にも披香殿があり、詩中で「新殿」と言っているのは、あるいはこれによるのかもしれない。ただ、ここでは主に、艶めいた、なおかつ歴史的な事柄をもすぐに連想させるこの宮殿の名前を借りて、宮廷で催される歌舞特有の雰囲気を際立たせているのである。

披香殿の歌舞について、李商隱は特に具体的な描写をせず、「珠箔軽明にして玉墀^{きょくち}を払^{はら}」う光景を描くことに重点を置いている。「珠箔」とは、真珠で飾ったすだれのことであり、「玉墀^{きょくち}」は、宮殿前の白い石段を言う。小さく透き通った真珠のすだれが、真っ白な石段をそっとなでている。その光景は、華やかな美しさの中に軽くしなやかな動きを感じさせ、軽やかに歌い踊る雰囲気を表現するには格好の題材である。真珠のすだれが白い石段をなでる光景は、踊りの「腰つきを競い合っている（闕腰支）」宮廷の歌妓たちと一体となり、それ全体が調和のとれた一つの情景のように感じられる。

「闕腰支（腰支^{たか}を闕^{たか}はす）」の三文字は、簡潔でありながら、その意味するところを余すことなく伝えている。宮廷の歌妓が軽やかに舞うあでやかな姿を描くだけでなく、その美しさを競い、

皇帝の寵愛を得ようとする歌妓たちの心の様子までをも伝えているのである。さらに、その技のすばらしさを競うという点で、後半二句の「魚龍の戯」や「偃師」とも、概念上のつながりを形づくっている。つまり「鬪腰支（腰支を鬪はす）」は、この詩の前半部および後半部のいずれにも関わり、詩全体の主旨を暗示する、キーワードと言えよう。

2

第三・四句「不須看尽魚龍戯 終遣君王怒偃師」では、一転して、風刺や慨嘆を句中に込めることに的を絞っている。

「魚龍の戯（魚龍戯）」とは、本来、古代の雑技のうち、人が珍しい動物に扮して様々なマジックを行うものを言う。《漢書》⁽⁶⁾西域伝の賛に、顔師古⁽⁷⁾が以下のような注を付けている。

魚龍とは、金を吐く獣⁽⁸⁾となって、まず庭の隅で戯れる。続いて、宮殿前の流れに飛び込んで比目魚⁽⁹⁾に姿を変える。飛び上がって水を噴けば、霧となって日の光を遮る。それが終わって、今度は八丈の黄龍となり、水から出て庭で戯れれば、再び太陽が輝いて明るくなる。⁽¹⁰⁾ここから、「魚龍戯」が、変幻自在で見る者の目をくらます、見事な出し物であったことがうかがえる。ただ、「宮妓」というこの詩のタイトルから考えると、この詩における「魚龍戯」は、実際に雑技としての魚龍を指したものではなからう。おそらくは、「魚龍戯」という言葉を借りて、歌妓たちが見たこともないような舞を次々と披露するさまを喩えているのだろう。

第四句の「怒偃師（偃師を怒る）」は、《列子》⁽¹¹⁾湯問篇の中の故事をふまえている。

周の穆王⁽¹²⁾は、西に向かう途中、偃師という名の腕のよい細工師に出会ったという。偃師は歌や踊りのできる偽の役者（実はからくり人形）を献上した。偃師が「そのあごを押せば歌い出し、歌はメロディーに合っていた。その手を上げると舞い踊り、踊りはリズムに合っていた。いろいろな仕草をしたが、それはみな思いのままであった。⁽¹³⁾」穆王はこれを本物の人間と思い、寵妃の盛姫とともにその演技を楽しんだ。歌舞がまもなく終わろうという時、役者が「目くばせをして王のそばにいた侍女を呼んだ。⁽¹⁴⁾」穆王はこれに大層怒り、偃師を殺そうとした。驚いた偃師は、すぐさま役者をばらばらにした。そして、なめし革や木材、にかわや漆など、人形の材料を暴いて見せ、ようやく難を逃れることができた。

つまり、この詩の第三・四句では、歌妓たちのこの世のものとは思えぬような見事な歌や踊りを見終わる前に、巧みな腕を持つ「偃師」に、君王は腹を立てるだろうと言っているのである。

3

もとの話では、「偃師」は、一人の手先の器用な人物である。しかし、彼はその器用さ故に、危うくその命を失いかける。このように、あれこれ手を尽くした挙げ句、かえって自ら災いを招く

という事象の中には、一つの典型が見て取れる。李商隱が偃師の故事を用いたのは、まさにこの点に着目したからである。この詩の歌妓と「偃師」との関係が、もとの話の役者と偃師の關係に相当することは明白だ。さらに、この詩に描かれている「腰支を闘はす」さまや「魚龍の戲」が、もとの故事における役者の歌や踊りに相当することも明らかである。これらによって浮き彫りになるもの、それは、偃師の優れた腕前にほかならない。そうだとすれば、「不須（～するには及ばない）」、「終遣（結局は～させる）」といった比較的意味のはっきりした言葉を介して見れば、この詩が何を強調しているのか、見いだすのは容易である。巧みな技を持つ偃師も、結局は君王の怒りに触れて自ら災いを招く結果を免れないこと、この詩はそれを強調している。

試みに、〈夢沢〉や〈宮辞〉等、宮廷生活を詠み、しかもそこに何らかの風刺の意を込めた詩と、この〈宮妓〉詩とを関連づけて考えてみよう。

未知歌舞能多少 未だ歌舞の能く多少なるを知らざるに

虚減宮厨為細腰 虚しく宮厨を減じ細腰と為る

宮中で歌い踊ることを いつまで続けられるかわからないのに

君王好みの細い腰になろうと 娘たちは虚しくも食事を減らす

〈夢沢〉

莫向樽前奏花落 樽前に向かひて花落を奏すること莫かれ

涼風只在殿西頭 涼風は只だ在り 殿西の頭^{ほしり}

せっかく侍ることのできた君王の宴席で〈花落〉の曲など奏でてはならない

花を散らしてしまう冷たい秋風がもう宮殿の西にまで迫ってきているのだから

〈宮辞〉

不須看尽魚龍戲 看尽くすを須ひず 魚龍の戲

終遣君王怒偃師 終に君王をして偃師を怒ら遣めん

「魚龍戲」のような歌妓たちの見事な歌や踊りを最後まで見るまでもない

巧みな技を持つ「偃師」も 結局は君王の怒りに触れずにはいられないのだから

〈宮妓〉

すると、これらの句の間には、非常によく似た言外の意が含まれていることに、すぐに気づくだろう。

宮廷において歌ったり踊ったりすることは、そもそも政治の世界に身を置くことの喩えである。さらに、寵愛を得ようと化粧を施す女官や、一時の寵愛を得て将来を憂えることを知らない妃、巧みな技を見せながら結局は自ら災いを招いてしまった偃師は、まさに歪んだ政治の世界が生んだ、歪んだ産物なのである。いずれも、よい時が長くは続かない者たち——詩人の目には、そう映っている。

劉学鍇（関久美子訳）

-
- (1)蓬萊宮：唐代の宮殿。陝西省長安県の東に位置する。もと大明宮と言ったのを、龍朔二年、高宗が蓬萊宮と改めた。
- (2)未央宮：前漢の宮殿。陝西省長安県の北西に位置する。
- (3)漢の成帝：元帝の長子。劉鷺。在位二十六年(BC33-BC7)。
- (4)趙飛燕：(BC?-BC1)漢の成陽侯・趙臨のむすめ。舞がうまく、軽やかで燕に似ているとされ、飛燕と呼ばれた。成帝の女官となり（このため班婕妤は寵を失った）、やがて皇后となったが、のち庶民に落とされ自殺した。
- (5)慶善宮：《李商隱詩歌集解》朱鶴齡の注に《雍録》を引き、「唐慶善宮有披香殿」とある。《雍録》（《四庫全書》史部、地理類）〈慶善宮〉には、「本名武功高祖旧第也、在武功県渭水北、太宗誕生於此、貞觀六年改慶善宮、上賦詩呂才被之管絃、名慶善樂」とあり、注に「有披香殿」とある。
- (6)《漢書》：一二〇巻。後漢の班固の著。建初三年(78)頃成立。
- (7)顔師古：(581-645)唐、京兆万年の人。之推の孫。字は籀。諡は戴。若くして学識文才に富み、訓古の学に通じた。官は高祖の時、朝散大夫・中書舍人、太宗の時、中書侍郎・秘書少監。太宗の詔を受けて五經の文字を考定し、また太子承乾のために《漢書》に注した。
- (8)金を吐く獸：「舍利之獸」。「舍利」については、《晋書》樂志に「後漢正旦、天子臨德陽殿受朝賀、舍利從西方来、戲於殿前、激水化成比目魚、跳躍嗽水、作霧翳日。畢、又化成龍、長八九丈、出水遊戲、炫耀日光。」と見える。また、張衡〈西京賦〉に宮中で行われる雑技について記す中に「舍利颺颺、化爲仙車。」とあり、李善注に「舍利、獸之名、性吐金、故曰舍利。」とある。高歩は《文選李注義疏》で「唐写『含』作『舍』、毛本同。案…似『含』字是。」としている。同様に、曹植〈鞞舞歌〉大魏篇にも「白虎戲西除 舍利從辟邪」の「舍利」を「舍利」とするテキストが見られる。
- (9)比目魚：一目の魚で、二尾が並んではじめて遊泳するという。
- (10)魚龍とは、金を吐く獸となって、まず庭の隅で戯れる。続いて、宮殿前の流れに飛び込んで比目魚に姿を変える。飛び上がって水を噴けば、霧となって日の光を遮る。それが終わって、今度は八丈の黄龍となり、水から出て庭で戯れれば、再び太陽が輝いて明るくなる。：「魚龍者、爲舍利之獸、先戲于庭極；畢、乃入殿前激水、化成比目魚、跳躍嗽水、作霧障日；畢、化成黄龍八丈、出水敖戲于庭、炫耀日光。」
- (11)《列子》：八巻。戦国時代の列禦寇の作と伝えられる、道家の書。後世《道蔵》に収められたため、《冲虚至徳真經》とも呼ばれる。
- (12)周の穆王：周、第五代の王。昭王の子。姫滿。世に穆天子という。八駿馬を得て西に巡狩した。
- (13)「そのあごを押せば歌い出し、歌はメロディーに合っていた。その手を上げると舞い踊り、踊りはリズムに合っていた。いろいろな仕草をしたが、それはみな思いのままであった。：「鎮其頤則歌合律、捧其手則舞応節、千變万化、惟意所適。」なお「鎮」字について、原文では劉学鍇氏が「抑（おさえる）」と注を付けている。

(14)「目くばせをして王のそばにいた侍女を呼んだ。」：「瞬其目而招王之左右侍妾。」

宮 辞

君恩如水向東流
 得寵憂移失寵愁
 莫向樽⁽¹⁾前奏花落
 涼風只在殿西頭

宮 辞

君恩は水の如く東に向かひて流れ
 寵を得ては移らんことを憂ひ 寵を失ひては愁^{うれ}ふ
 樽^{そんぜん}前に向ひて「花落」を奏すること莫^なかれ
 涼風は只だ在り 殿西の頭

この詩は宮怨詩⁽²⁾であり、皇帝の寵愛を得たり失ったりするという、宮廷中の女官にとってもっとも切実な問題をとらえて、女官たちの悲惨な運命をえがきだしている。

1

第一句「君恩如水向東流」は、流れる水をもちいて皇帝の恩寵を喩えており、構想が非常にたくみである。流れる水なのだから、移動して定まらない。皇帝の恩寵は、流れる水のように流動的で、定まることがない。そうであるからには、女官が寵愛を得ることや寵愛を失うことも、これにしたがって変化し、定まることがない。今日、皇帝の恩寵が巡って来ても、明日には移り去ってしまいかねない。つまり女官は今日寵愛を得ても、明日にはまた寵愛を失ってしまうのだ。いったん寵愛を失えば、皇帝の恩寵は流れ去る水のように戻ることはない。だから寵愛を得る失うということにかかわらず、女官たちを待ち受けているのは、いずれにせよ不幸なのである。

そしてそれが、第二句目「得寵憂移失寵愁」にいう、女官が自分の将来に対して憂うことを導き出しているのである。

寵愛を得ている時は、皇帝のところが変化し、恩寵が移ってしまうのを恐れている。寵愛を失った時には、悲しみや憂いで胸が張り裂けそうになり、その悲しみや苦しきは言いあらわせない。

このように、寵愛を得ることを憂え、また寵愛を失うことをも憂うという矛盾した苦しい心のうちを余すところなく描きだしている。

一句のなかに重ねて用いている「寵」の字は、まさに皇帝の恩寵が女官に対していかに大きく影響するものであるかを物語っている。なぜなら女官の将来は完全に皇帝の手のうちにあり、それに操られているからである。

後の第三・四句「莫向樽前奏花落 涼風只在殿西頭」は第二句をうけて、寵愛を失った者のことばを借りて、寵愛を得ている者に注意をうながしている。「花落」とは〈梅花落〉⁽³⁾のことで、これは楽府の横吹曲中の笛曲の名前⁽⁴⁾である。「樽前奏花落（樽前に花落を奏す）」とは、皇帝にはべり宴会の席で音楽（〈梅花落〉）を演奏することをいっている。

南朝梁の江淹⁽⁵⁾の〈擬班婕妤⁽⁶⁾詠扇⁽⁷⁾〉詩に、

窃恐涼風至　　ただ心ひそかな気がかりは、涼風が吹いてきて、
吹我玉階樹　　我が玉のきざはしの、そのあたりの木々をそよがす秋となること。
君子恩未畢　　そのころともなれば、殿御の慈しみがまだつきもせぬそのうちに、
零落在中路　　はや道のなかばで、うらぶれたまま捨てられるかも知れぬ。

というものがある。班婕妤がみずからを団扇にたとえて、冷たい秋風がひとたびふけば、うちわは捨てられてしまうことをもちいて、江淹の詩では、皇帝の恩寵が途絶えてしまうことをたどしている。

この〈宮辞〉詩の下二句は江淹の〈擬班婕妤詠扇〉詩の意図するところを用いており、意味は以下のようになる。

あなたは皇帝主催の酒宴の席でそんなに得意気に〈梅花落〉を演奏してはなりません。あなた自身が今にきつとしおれてしまう一輪の花ではありませんか。冷たい風が宮殿の西側に近づき、あなたもほどなく花と同じように無情にも吹き落とされてしまうのだから。

「花落」ということばはふたつの意味あいをふくんでいる。曲名を指すだけでなく、「花」が冷たい風によって吹き「落」とされることをも暗に指し、寵愛を得たものが恩寵をたよるのはむずかしいことの隠喩となっている。

この詩は全体をつうじて議論の形式をもちいている。ただ比喩や双関語⁽⁸⁾のもちい方がきわめて巧みなので、それが議論のなかに具体的なイメージを含ませている。だから読むと意味が奥深く、はっきりとストレートに言うのに比べると、内容に味わいがある。紀昀⁽⁹⁾がこの詩を以下のようにいっている。

怨みやそしりが極限に達していながら、それをゆつたりと詩に詠じることの妙は失われていない。⁽¹⁰⁾《李義山詩集輯評》⁽¹¹⁾

まさにこの詩のもつ特色を言いあてている。

王思宇（鈴木拓也訳）

(1) 樽:《全唐詩》、劉学鐸・余恕誠著《李商隱詩歌集解》では、「尊」字としており、校記などは全く記されていない。なぜならば「樽」と「尊」は共に「酒を盛る器」という意味であり、韻も同じであるため、特に問題とすべき箇所ではないためである。

(2) 官怨詩: 皇帝や王の宮中にいる女性が持つ、憂いや苦しみ、悲しみや怨みといった感情を詠んだ詩のこと。

(3) 〈梅花落〉: 横吹曲という音楽ジャンルの一つで、もともと笛という楽器を用いて演奏する曲。六朝時代、宋の鮑照、梁の呉均、陳の後主、徐陵などに同題の作品がある。唐代に入ると、大角曲という音楽ジャンルに〈大梅花〉〈小梅花〉として残った。

(4) 楽府の横吹曲中の笛曲の名前: 宋の郭茂倩編《樂府詩集》第二十四卷横吹曲辞四に〈梅花落〉が13首収められている。作者を上げれば、上記注(3)の作者のほか六朝陳の蘇子卿、張正見、江総、唐の廬照鄰、沈佺期、劉方平がいる。また、横吹曲とは楽曲の名前で、鼓吹曲と共に武楽に属する。鼓吹曲が簫箏を演奏し朝会・行進に用いるのに対し、横吹曲は鼓角を演奏し軍中で用いた。詳細は《樂府詩集》第二十一卷横吹曲辞一を参照のこと。

(5) 江淹: (444～505) 考城の人。字は文通。宋・齊・梁の三代に仕える。官は梁の天監中、金紫光祿大夫に至り、醴陵侯に封ぜられた。〈上海辞書出版社《唐詩鑑賞辞典》訳注稿—李商隱篇(8)—〉(《大東文化大学紀要》第39号〈人文科学〉大東文化大学発行・平成11年3月31日)の[31]〈無題〉の注(1)に既出。

(6) 【原注】婕妤: 宮中にいた女官の名前。班婕妤はかつて漢の武帝の寵愛を得るも、のちにその寵愛を失った。

(7) 〈擬班婕妤詠扇〉: 《芸文類聚》卷四十一にこの詩題が見えるが、《玉台新詠》卷五は〈班婕妤〉とし、《樂府詩集》第四十二卷では〈怨歌行〉としている。全文は以下の通り。

紈扇如圓月	紈扇 圓月の如し
出自機中素	機中の素 ^{より} 出 ^い ず
画作秦王女	画 ^{えが} き作 ^な す秦王の女
乘鶯向煙霧	鶯に乗りて煙霧に向かふを
采色世所重	采色は世の重んずる所
雖新不代故	新たなりと雖も故きに代はらず
窃愁涼風至	窃かに愁ふ涼風の至りて
吹我玉階樹	我が玉階の樹を吹かんことを
君子恩未畢	君子の恩の未だ ^畢 らざるに
零落在中路	零落して中路に在らん

本注の書き下し文、及び本文中の訳は、小尾郊一・花房英樹著 全釈漢文大系《文選》集英社によった。

(8) 双関語：あいまいな言葉。かけ言葉。二様の意味のあること。

(9) 紀昀：〈上海辞書出版社《唐詩鑑賞辞典》訳注稿－李商隱篇(2)－〉(《大東文化大学紀要》第32号〈人文科学〉大東文化大学発行・平成6年3月31日)の[6]〈悼傷後赴東蜀辟至散関遇雪〉の注(10)を参照。

(10) 怨みやそしりが極限に達していながら、それをゆったりと詩に詠じることの妙は失われていない。：怨誹之極而不失優柔唱嘆之妙。

(11)《李義山詩集輯評》：清・沈厚垓編。何焯、朱彝尊、紀昀の評箋をまとめたもの。〈上海辞書出版社《唐詩鑑賞辞典》訳注稿－李商隱篇(9)－〉(《大東文化大学紀要》第40号〈人文科学〉大東文化大学発行・平成12年3月31日)の[32]〈碧城三首(其一)〉の注(11)に既出。

代贈二首

楼上黄昏欲望休
玉梯横絶月如鉤
芭蕉不展丁香结
同向春风各自愁

代贈二首

楼上の黄昏 望まんと欲するも休め
玉梯は横絶し 月は鉤の如し
芭蕉は展びず 丁香は結び
同に春風に向ひて 各々自ら愁ふ

この〈代贈〉詩は、「贈答詩」の形になぞらえて作った作品である。「代贈」という題の詩は二首ある。これはその第一首である。この詩は、女性のことばを借りて、恋人と会えない愁いを描いている。

詩に描かれている時刻は、春の夕暮れ時である。詩人は、景物に思いを託すという方法を用いて、詩の中の主人公が見ている「缺月（欠けた月）」「芭蕉（ばしょう）」「丁香（ちょうじ）」などの景物の中から、彼女の思いを浮かび上がらせているのである。

1

詩の冒頭の四字は、「楼上黄昏（建物のあたりは日暮れ時）」と、詩のなかの時間と場所とをはっきりさせている。そのあとの「欲望休（望まんと欲するも休む）」の三字は、女性の動きを如実に描き出している。彼女は建物の方へ歩いて、遠くをちょっと眺めに行こうと足をふみだした。しかし、しょんぼりとして、やめてしまったのである。

ここでは、私たちに女性の仕草に目を向けさせるだけでなく、彼女が遠くをながめ見に行くという動作をやむをえず止めてしまったという心の内をもほのめかしているのである。

「欲望休」は、あるテキストは、「望欲休」に作っている⁽¹⁾。「休」は、「停止する」「やめる」という意味である。「欲望（望まんと欲す）」とは、恋人を眺め見に行きたいということである。しかし、どうして眺め見たいのに、止めてしまったのだろう。

これに対して詩人はけっして直截的には説明しない。なぜなら、そのように安直に物事を明らかにする方向へ進めば、詩の味わいがなくなるからである。詩人は周囲の景物を描くことによって、女性の思いを表現しているのだ。

南朝時代の詩人江淹⁽²⁾の〈倡婦自悲賦〉⁽³⁾では、漢宮の美人が寵愛を失って、独りでいるさまが描写されており、その中に「青苔積もりて銀閣渋く 網羅生じて玉梯虚し」⁽⁴⁾という句がある。「玉梯虚（玉梯虚し）」とは、「玉」製の「梯」子がただ「虚」しくかけてあり、登ろうとす

る人がいないことを言っているのである。この〈代贈〉という詩にある「玉梯横絶（玉梯横絶す）」とは、玉製の梯子がこわれていて、上に登りようがないことである。それは恋人が何者かにさえぎられて、ここに来ることができず、会えないことを喩えているのである。

この「玉梯横絶（玉梯横絶す）」は第一句「楼上黄昏欲望休（楼上の黄昏望まんと欲するも休む）」と繋がって、次のようなことを言っている。

女性は恋人と会うことを切望し、それゆえ遠くを眺望しようとした。しかし、彼はきっとやって来られないと、ふとそう思い、いたしかたなく足を止めた。

遠くを眺め見ようとしたがやめてしまった（欲望休）というのは、女性の複雑で矛盾に満ちた心の動きと、寂しく失望している様子とを、細かくリアルに描写しているのである。

「月如鉤（月は鉤の如し）」は、あるテキストでは「月中鉤（月は鉤に中つ）」に作っている⁽⁵⁾。意味は同じである。このことばは、周りの状況のもの悲しいようすを、はっきりと引き立たせるだけでなく、象徴的な意味をも兼ね備えている。月が欠けて円くないことは、まるで一組のカップルが出会えなかったことを象徴しているかのようである。

2

第三・四句「芭蕉不展丁香結 同向春風各自愁」でも、やはり景物を描くことによって、さらに詳しく女性の心の内を明らかにしている。第二句「玉梯横絶月如鉤」の欠けた月は鉤のようだ（月如鉤）というのは、女性が頭をもたげたときに見えた遠くの空の景色である。この第三・第四の両句は、女性がうなだれたときに見えた周りの地上の景色なのである。高い所から低い所、遠い所から近い所へと視点に動きがあっっておもしろみがある。

この中に出てくる「芭蕉」は、まだ葉の開いていない芭蕉である。李商隱より少し時代が下った、錢珝⁽⁶⁾の〈未展芭蕉〉⁽⁷⁾に「芳心は猶ほ巻くは春寒を怯るればなり」⁽⁸⁾という句がある。李商隱が描いているのは、まさしくこのようなようすである。ここでの「丁香（ちょうじ）」も、今がさかりと咲いている「丁香」ではない。花が開いていないつぼみの「丁香」である。これらはともに日暮れ時の冷たい春風を受けながら立っていて、その悲しげなさまは尽きるところがない。

これは、女性の眼前にある情景の、ありのままの描写である。と同時に、景物を借りて人物をも描いている。「芭蕉」によって恋人を喩え、「丁香」によって女性自身を喩えているのである。別々の所にいても心は一つであること、相手に会うことが出来ないために、ともに憂い苦しんでいることをほのめかしている。

景物の憂いが、人の憂いを引き起こし、それをさらに深めたのだというのは、「興」⁽⁹⁾という手法である。また、景物の憂いが、そのまま人の憂いでもあるのは、「比」⁽¹⁰⁾という手法である。「芭蕉」や「丁香」は、詩人が丹念に工夫を凝らした言葉である。しかし、同時にそれは、目についたものを、無造作につまみ取ってきたかのように、とても自然である。

情景と心情、景物と人物がとけあって一つとなっており、「比」と「興」とがとけあって一つとなっている。念入りに詩を作っているけれども、わざとらしく飾り立てた痕が少しもない。これはこの詩のたいへんよく出来ているところである。

ことのほか最後の二句「芭蕉不展丁香結 同向春風各自愁」は、その境地がたいへん美しく、うちに込められているものは尽きるところがないので、これまで人々に称えられてきた。《詩話類編》⁽¹¹⁾も、特にこの二句を挙げて、大いにほめたたえている。

王思宇（秋谷幸治訳）

（2003年9月25日受理）

(1)あるテキストは、「望欲休」に作っている：《才調集》では、一句目を「楼上黄昏望欲休」に作っている。

(2)江淹：(444～505)考城の人。字は文通。宋・齊・梁の三代に仕える。官は梁の天監中、金紫光祿大夫に至り、醴陵侯に封ぜられた。主な著に《齊史十志》などがある。＜上海辞書出版社《唐詩鑑賞辞典》訳注稿－李商隱篇(8)－＞（《大東文化大学紀要》第39号＜人文科学＞大東文化大学発行・平成11年3月31日）の[31]＜無題＞の注(1)に既出。

(3)〈倡婦自悲賦〉：《梁江文通文集》巻一、《芸文類聚》巻三十二に所収。

(4)「青苔積もりて銀閣渋く 網羅生じて玉梯虚し」：「青苔積兮銀閣渋、網羅生兮玉梯虚。」
「閣」《芸文類聚》では「閣」になっている。

(5)あるテキストでは「月中鈎（月は鈎に中つ）」に作っている：《才調集》では、二句目を「玉梯横絶月中鈎」に作っている。

(6)錢珝：晩唐の詩人。字は瑞文。おもな著作に《舟中録》がある。

(7)錢珝＜未展芭蕉＞：「冷燭無煙蠟乾 芳心猶卷怯春寒 一緘書笥蔵何事 会被東風暗拆看」

(8)「芳心は猶ほ巻くは 春寒を怯るればなり」：「芳心猶卷怯春寒」

(9)「興」：詩の六義のひとつ。現代の隠喩、象徴のような役目をする。

(10)「比」：詩の六義のひとつ。現代の明喩のような役目をする。

(11)《詩話類編》：全三十二巻。明、王昌会撰。歴代の詩話や随筆に書かれている詩論に関することばを集めて、「体格」「名論」「帝王」「忠孝」「節義」「夙慧」「科第」「神仙」「鬼怪」「方外」「宮詞」「閨秀」「妓」「題詠」「考訂」「品評」「詩賞」「詩遇」「詩究」「詩彈」「諧謔」「感慨」「讖異」「事逸」「吊古」「哀挽」「夢幻」「規諷」「雜録」などの二十九門に編集したもの。書物自体は北京図書館にあり未見。